

何ば嫌やと云ふても、周圍から脱がしに掛られると、其處は下に自慢の長襦袢を着てる物やさかい。萬更悪い氣持も致しまへん。不可んくと云ひ乍ら着物の肩を脱ぎますと派手な模様の襦袢。

「まア此姿どふだす。」

「良え事。恰度右圍次の石橋見たいなワ……………」

「イヨウ。高島一屋アー。(下座唄)なんたら愚痴だえ……………」

藝妓幫間の肩へ寄り掛つて、千鳥足で上つて参りました。

「サアく放せく。これから鬼事ぢや。俺しに掴まえられたら誰でも拘わん。肩脱がして踊らすぞ」
「キヤーツ」

大騒ぎで御座ります。あつちでも此方でも、交え返る様な大亂痴氣。そふかと思ひますと中には又極く柔順しふ、上品に花見をしてお在になる御仁も御座ります。

「玄伯老。草疲れやせんかな。」

「否え私しは此通り瘦せて居りますで、歩きます事は一向苦になりまへん。毎年の事乍ら此處の人は又別で御座りますなア。」

「さいナ。私や梅見は好きぢやが、どふも櫻と云ふと賑やか過ぎて具合が悪い。まア是れ丈け見たら充分ぢや。豪ふ晚ふ成らん内に歸るとしませふかい。」

「それが宜しふムります。……アツ。旦那さん、チョツと御覽遊ばせ。向ふで大肌脱ぎに成て扇子で顔を覆くしてなはる人。お宅の御番頭に能ふ似た恰好でおますが、次兵衛さんと違ひますかいナ。」

「アツハツハツ。何を云ひなさる。宅の次兵衛が彼んな事の半分もして呉れたら、何云ふ事が有ふぞい。いや人間堅いのも良えが、宅の次兵衛と來たら全でありあり石碓ぢやがナ。今朝も店で若い者に小言云ふてるのを聽てるとナ。いや舞妓と云ふ粉は一升何錢するたら、いや太鼓持と云ふ餅はどんな味がするたら。モ阿呆らしいて聽てられやせんぢやがナ。彼んな物を見た丈けでも目を廻しよるぢやろ」

「イヤ旦那さん。あれは他人の空似やムりまへんで。御番頭に違ひごわへん。……そ、そ、あれ御覽じませ」

「アハ、。自慢してゝも玄伯老も矢つ張り齡ぢや。もう大分お眼が悪んらしい哩。ドレく何んなお方と似てるちウのぢや。今眼鏡を掛けて見て進ぜふ。何のお人ぢや」

「あ。それく、向ふの一番大きな樹の下で、大手を擴げて、扇子で顔覆くしたお方……そ、そ、ヒヨロくして歩いてはります。あつ。倒けはつた。それあの御方……………」

「どれく。扇子で顔覆した、……ウ、ム……ア、彼のお方かいな……ヤツ。あ、ありやほんに……次。次兵衛ぢや。番頭ぢやがなあれは。あれならお前、大鼓持も藝妓も丸呑みに仕てよるぢや無いか